

おわりに — 閉会挨拶より —

農研機構畜産草地研究所

所 長 松 本 光 人

畜産草地研究所の松本と申します。講師の先生がたには、2日間、どうもありがとうございました。また、ご参加いただいた皆様がたにも、2日間、熱心なご討論をいただきまして、まことにありがとうございました。

という、かくいうわたし、昨日は農水省の本省で開かれていました農水省主催のシンポジウムに出ておりまして、こちらを失礼させていただきました。そちらは、米、グリーンとしての米の飼料化がテーマでした。現在農水省の大きな政策目標の一つである飼料自給率向上に向けて、それをテーマとしたシンポジウムだったのですが、今日の議論の最後のほうに肉食、肉を食べることについての議論がいろいろ出てまいりました。日本においては、やはり水田あるいは稲というのが神聖なものであり、それを家畜に食べさせるのはいかがなものかというような議論が、ともすれば出てくるのではないかというようにも思います。稲作儀礼である新嘗祭のような神事が昔から行われてきており、現在は勤労感謝の日になっています。このような中では、米を家畜が食べて、その米を食べた家畜を人間が食べるということが当たり前になって、本当に日本に肉食の文化、風土に合った文化というのが定着していくのではないかというように思っております。

それで、昨日のシンポジウムではそのような話をいたしました。こちらの会場では、クローン技術の普及に関してだいたい議論が盛り上がったということを伺いました。わたしどもは、先ほどの総合討論の中でもお話がありましたように、クローン技術が、今、普通に行われているさまざまな繁殖技術と同様に、当り前の技術として畜産の中で利用されていくことになることを確信しております。そのためには、やはり、今いろいろな問題があ

る、解決しなければならないいろいろな課題がある、それを一つ一つ解明し克服していくことが重要だろうと思います。

先ほどお米について話しましたが、昔、白米毒素説というのがありました。つまり玄米を白米にすると、ぬかが抜けてビタミンB₁欠乏で脚気になるというのが現在の知識ですが、それはビタミン欠乏ではなくて、白米が毒なのだ、ぬかがそれを中和するのだと、そのような学説もあったわけです。生命現象が全て明らかにされたわけではありません。とくに発生や分化などの分野において、まだ解明していかなければならないことがたくさんあるだろうと思います。そのために、クローンの研究は、大いに貢献していくのだろうと思っております。

今後とも、わたしども、体細胞クローン技術の高度化、さらに諸課題の解決のために農研機構、畜産草地研究所、全力で研究を進めていきます。そして、その情報については、皆さんに随時公開して、明らかにしていく、良いことも、悪いこともそれぞれ明らかにしていきたいと思っております。

また、先ほどからお話ありましたけれども、食べていただくということも重要だということで、昨日の懇親会でも食べていただきましたが、今日もこれからまた試食ということもございます。ぜひ皆さんで育ててきた体細胞クローン技術が、当り前の技術になるように、これからも頑張っていきたいと思っておりますので、よろしくご支援をいただきたいと思います。どうも2日間ありがとうございました。

注) 本稿は、閉会挨拶を録音し、テープ起こしをしたものです。